

歴史探訪

クラブ! 其の119

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

田原が生んだ水彩画家 中田恭一

平成23年、田原市博物館で、ある画家の新春を飾る展覧会が開催されました。その人の名は、中田恭一。初めて名前を聞いた方がほとんどでしょう。

中田恭一(1895~1960)は、農家の子として現在の大草町で生まれました。大草尋常小学校、神戸高等小学校で学び、高等小学校卒業後に同校の教員を務めました。絵は17歳ごろから、豊橋の夏目七作(ひらめ)に学び始めました。そして、東京で教員を

しながら、本郷洋画研究所に入所し、太平洋画会の石井柏亭・石川寅治に絵を学びます。大正8年、三重県伊賀上野で教員となり、その傍ら作画活動を進め、昭和2年の第8回帝展に初入選すると、3年連続で入選しました。そして決意を新たに昭和8年、教員を退職し、埼玉県川口市に移ります。安定した職を投げ打つことは、家族を持つていた恭一にとって大きな決断だったでしょう。上京

前の新聞記事からは、東京進出にける意気込みが伝わってきます。その後、恭一は第14回・15回帝展も入選、昭和15年の紀元2600年記念展覧会に入選、昭和18年には紀元2603年全日本水彩画記録画に推奨されました。翌年、生まれ故郷の大草に戻り、風景や肖像画を描き続けます。そして、昭和35年に66歳で一生を終えました。



▲新聞記事(昭和8年)

田原の童話作家、山田もさんの童話に、小学校の教員をしながら、学校が



▲展覧会入選の習作 銚子・犬若(昭和12年・千葉県)

終わると豊橋まで歩いて絵の勉強に出かけ、夜明けに帰宅する勤勉

な彼の姿が記されています。また、熱中するがあまり「本や絵でめしが食えるか」と父親に怒られる恭一少年のことも書いてあります。本当に絵が好きだったのでしょうか。すでに心の中には、画家として大成する夢が育っていたに違いありません。

恭一は多くの展覧会で入選を果たすとともに、学校の水彩画の教科書や、伊賀上野時代には歴史小説の執筆も手がけるなど、多方面にその才能を発揮しました。恭一は、水彩の風景画を得意としていました。水彩の明るく清々しい画風は、恭一の人柄を表しているのでしょうか。またその得意とした風景画の作品では、その風景に溶け込んだ人々のくらしや風土を、温かなまなざしでとらえて

います。

今回の展覧会には、作品だけでなく、習作、スケッチのほか、恭一の人柄を知る資料も展示されていました。展覧会を鑑賞して感動したのは、その多くの作品を通して、彼の絵への熱い志を感じ取れたことです。恭一がどこまで自分の夢を達成できたのかは分かりません。しかし、その作品1点1点から、好きな絵を生きた生きと描き続けた彼の姿が見えてきたのでした。作品もさることながら、中田恭一に夢を追う素晴らしさを学んだ展覧会でした。

※帝展とは、帝国美術院の開催した展覧会のこと。1946年以降に日展と改称されています。

(増山)

今月の「表紙」

▼いよいよ、ごっつい菜の花畑のライトアップが始まりました。国道42号を走っていると、真っ暗な中に、突如浮かび上がる幻想的な風景に目を奪われます。ライトアップの期間は3月21日(月・祝)まで、時間は午後6時~9時です。皆さん、ぜひ足をお運びください。(O)

【表紙の写真】ごっつい菜の花畑(田原フラワーパーク)